

## 第二言語習得研究入門

生成文法からのアプローチ

若林茂則 編著

白畠知彦・坂内正徳 著



A5判 271pp.  
本体2,800円  
新曜社

### 研究のおもしろさを伝える良書

なぜ第二言語（外国語）の習得は難しいのか？本書は、何がなぜ難しいのかという問題について、現在精力的に第二言語習得研究に携わる3人の著者が3つのテーマに焦点を当て検討している。.

生成文法という言語理論の枠組みから、日本語母語話者による英語の習得を中心に代表的な先行研究を取り上げ、それらの成果と問題点、まだ明らかになっていないこと等について、順序立てて丁寧に解説している。表紙には一見複雑そうな樹形図が（美しく）描かれている。ひょっとすると、この表紙を見ただけで怖じ気づいてしまう読者がいるかもしれない。しかし、無用な心配であろう。各テーマごとに、言語現象の記述と理論的背景の説明があり、取り上げた研究についても実際のデータが簡潔に表やグラフにまとめられ、議論の裏付けに役立っている。

言語は限られた数の要素とそれらを組み合わせる規則により、無限大の文を作り出す仕組みをもつていて。全ての言語の規則は、言語に普遍の文法、すなわち普遍文法に含まれ、人の「こころ」（=脳）に存在すると考えられている。第1章では、生成文法理論に基づく第二言語習得研究の意義につい

て論じ、研究の方向性を明確にしている。第2章は、統語構造（文構造）に焦点を当て文法の知識（言語能力）について概説している。

第3章以降の各章では、照応表現の解釈（英語の再帰代名詞 herself/himselfなど）、wh疑問文におけるwh句の移動に関する制約、主語の義務性について、80年代後半から最近までに行われた代表的な研究を取り上げ、その概要を論じている。各研究は年代順に取り上げられ、その意義や問題点が具体的かつ論理的に解説されているので、研究の流れや発展の経過がとても良く擋める。対象となっている学習者の母語や実験方法も多様であり、基盤となる理論の変遷により実証的研究における問題の捉え方も変化してきた点についても丁寧に説明されている。

本書は脚注も充実しており、関連する論文や異なる議論を展開する論文なども随所に紹介されている。取り上げられた研究成果は、第二言語学習者が、教室などで教えられた以上の複雑で微細な言語知識を有することを示している。第二言語の文法発達過程には、学習者の母語にかかわらず普遍的な特性が関与すると言えるであろう。同時に、母語の果たす役割も大きく、個別的な特性が関与することも明らかにされている。

各章を通じて本書に貫していることは、各研究を批判的に論じる姿勢である。どのような研究にも長所と短所がある。先行研究論文等を批判的に読む姿勢は重要であり、学ぶところが多い。第二言語習得研究は面白い分野だと感じさせる良書である。

（東京国際大学教授 平川真規子）